



化石館だより

コラム

研究誌に記された明治期の金生山

金生山における化石研究の歴史を調べている中で地学雑誌3巻10号（明治24年）に「赤坂近傍に於ける有孔虫並びに石蓮虫石灰岩の散布」という記事を見つけた。有孔虫とはフズリナ類のことであり、石蓮（セキレン）虫は棘皮動物のことなのでウミユリを指すものと思われる。1ページに満たない短報ではあるが金生山に関する記事なので興味をもって読んでみた。



有孔虫：フズリナ類（ヤベイナ）



石蓮虫：棘皮動物（ウミユリ）

記事の冒頭は「美濃赤坂金生山の灰層は古生元の化石を産するを以て広く内外に知られたるものにして其の化石中地学上最も緊要なるものは有孔虫類にして欧米及び志那等の煤炭紀層に特現するものなれば本層も正に同層に属すべきものたり・・・」のように書き出されており、明治24年当時、既に金生山は日本における古生代の化石産地として内外に知られた場所と認識されていたことが分かる。また、金生山の化石の中でも学問上重要なものは有孔虫化石であり、金生山から産するフズリナ属やシュワゲリナ属のフズリナ類化石は石炭紀の地層だけに産出するものであるから、金生山の石灰岩が石炭紀のものであることは間違いないとしながらも、化石は石灰岩からのみ産出し周りにある岩石からは一つも産出しないことから、どこからどこまでが石炭紀の地層かは未定であると疑問を呈している。

また、欧米では石炭紀の地層からは石炭が産出するが、日本では金生山の近くから石炭が産出していないのはなぜかという疑問に対しては、化石のほとんどが海棲動物のものであることから日本は当時海の底であったと説明している。

更に前述の疑問については、有孔虫や石蓮虫化石は赤坂だけでなく連続する地層からも産出しているとして岐阜県、滋賀県、三重県など近隣の化石産地を列挙している。

また別資料ではあるが、明治十七年八月という日付の記された「本邦化石産地目録」も見つかった。東京大学に地質学教室が開設されたのは明治10年であることを思うと、僅かな期間に精力的に研究が進められていたことに大変驚いた。この目録は地質調査所東京大学及び博物館に集積・所蔵されている化石標本に基づき、北海道も含めて全国各地を網羅し地質時代別に分け、276個所について地名と産出化石が記されている。

1 古生紀煤炭期之部	・ ・	52 地点	5 第三紀之部	・ ・ ・ ・ ・	126 地点
2 中生紀三聯期之部	・ ・	5 地点	6 時期未定之部	・ ・ ・ ・	28 地点
3 中生紀侏羅期之部	・ ・	31 地点	7 北海道之部	・ ・ ・ ・ ・	24 地点
4 中生紀白亜期之部	・ ・	10 地点			

本書には、岐阜県における古生代の化石産地として、飛騨で大野郡久手村（フズリナ虫）、吉城郡在家村（フズリナ虫）の2ヶ所、美濃では、池田郡上東野村（フズリナ虫）、不破郡赤坂村（フズリナ虫・石蓮・貝石）、同岩手村（貝石）、同大石村（貝石）、同北方村（貝石）、多気郡勢至村（石蓮）の6ヶ所が記されていた。なお、これらの地で産出する化石としてフズリナ、石蓮、貝石等の名が記されているが、ほとんどの場所が1種類のみ記載であるのに対し、赤坂村（金生山）は3種類の名が記載されており他所との違いが際立っていた。

なおフズリナ、石蓮、貝石の他には長門国美祢郡河原村に多孔虫が、陸前国気仙郡世田米村に珊瑚の名があるだけなので、古生代の化石はフズリナ、石蓮、貝石の他によく知られていなかったようである。また当時の地質時代区分や各地質時代の名称なども興味深いものであった。

（文責：高木洋一）



前期企画展

明治期における金生山の化石研究

とき 5月10日(日)から

場所 金生山化石館 2階展示室

内容 明治期に行われた赤坂石灰岩(金生山)に関する化石研究について紹介します。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@city.ogaki.lg.jp